



米田淳一

Junichi YONETA

涙
tear



「しかし往年の御殿場山北機関区のように出来ればと思ったのだが、結局この小規模になってしまったな。

非力で済まないが」

樋田はそういつつも、この機関区の写真を取ることに熱心だった。

北急が蒸気機関車動態保存のために作った非電化機関車用の新戸田機関区。

その給水塔やスポットの風景は、ここだけが昭和前期に戻ったような風景だ。

北急ではこの機関区そのものをテーマパークのようにして観光資源化するのだ。

「平成生まれにはわからないかもしれない。私も気づけば蒸気機関車が廃止されていた世代だ。蒸気機関車全盛の時代は知らないが、でも蒸気機関車には独特の魅力がある。やはり残していきたいものだ。

その時代と、その文化を」

「そうですね」

その時だった。

「社長、これ」

非番でツイッターを見ていた若い鉄道員が口にした。

「中国の高速鉄道で事故だそうです」

みな、ざわめいた。

「やはり運転開始から1ヶ月持たなかったか」

樋田はそうつぶやくと、すぐに指示を飛ばす。

「中国に行く。医師団を連れてだ。北急登が丘医院の医療チームを呼集しよう。ここ発の特急あさぎりの予備席で私は東京から羽田経由で中国に向かう。山崎重工もきっと現地に技術チームを投入するはずだ。北急車両部も副統括を出してすぐに現地入りする。重工にはビジネスジェット機があるはずだ。それですぐに行けるはずだ。一刻を争う。

それと我社でも全区間で安全再点検を。事故は奇妙な連鎖をすることがある。航空機事故の場

合はまさにそうだ」

「でも、北急は中国の高速鉄道連合からは脱退したんじゃないんですか」

「ああ。脱退した。でも、同じ鉄道で事故が起きたんだ。他人ごとでもないし放っておくこともできないさ」

「社長、あさぎり5号7号車12列C・D席取れました！」

「ありがとう」

樋田はそう答えると、再び給水塔を見上げた。

「社長、事故現場の写真がアップされています！」

それに皆が見入って、直後に皆がそれぞれ天を仰いだ。

追突した高速列車が、高架からまるで特撮映画のようにぶらりと垂れ下がり、落下しているその写真はあまりにも凄絶だった。

「社長、お言葉ですが、正直」

技術部の主任、寺山が樋田に具申した。

「おそらく、救護団を連れていっても入国すら拒否されると思いますよ」

皆がその言葉に目を見あわせた。

「わかっている」

「あれだけの彼らの異常さに直面してもなんですか」

「乗客の皆さんには全く関係ないことだ」

「でも社長も、あの時の悲しさをお忘れではないはずです！」

樋田社長も悲痛に顔を歪めていた。

「わかっている！」

社長の強い言葉に、皆がざわめいた。

「寺山さん、北急が中国の高速鉄道計画に途中まで参加して、脱退したのは知っているんですが、どういういきさつがあったんですか」

寺山は話すかどうかをためらったが、樋田はうなずき、そのアイコンタクトで話し始めた。



「鉄道の2012年問題というのは知っているはずだ。これまで複々線化や路線延長などで国内の鉄道メーカーには多くの仕事があった。しかしそれが2012年で一巡し、新型車両の大量増備はぱったりやみ、あとは少子高齢化で急激に先細る。

そこで日本の鉄道メーカーは海外輸出に活路を見出すしかなくなった。そしてそのうちの 하나가中国の高速鉄道だった」

「なんで中国なんかに輸出するのかわかったら」

「ああ。日本の車両メーカーはこのまま国内需要を待っていたら、座して死ぬことになる。

そして我が北急技術部は、山崎重工と共に組んで、鉄道車両の室内アメニティーの技術協力をすることうしようとした。今から7年ぐらい前の話だ」

寺山はそう言うと、自分の情報タブレットを取り出した。

「北急は高速寝台列車の設計と運用システム支援を担当しようとした。

当時の中国の列車は最高速度65キロ程度、しかも硬座車と言ってろくなクッションもない座席車に皆20時間近く揺られて、春節のたびにあの広い国を移動していた。劣悪な環境だったのに、それでも中国の人々はそれに乗るしかなかった。

我々は彼らに快適な旅をと思い、奮起した」

そして、寺山の顔が歪んだ。

「その時だった。我々がこの写真を広報用に持ちだし、パースを作った。これに中国の鉄道当局は激怒した」

「なぜですか？ 普通の鉄道写真じゃないですか」

「橋梁が写っている、それが彼らの理由だった。たしかに国情によっては橋梁は軍事的な意味合いから撮影禁止ということもある。専制国家では特にそうだ。

だから我々は橋梁の写真に修正をかけ、さらにCGで実際には存在しない橋梁にした。

だが、彼らは「とにかく削除しろ」の一点張りだった。

話を聞くと、どうやら彼らは橋梁を写したことがすでに問題であって、その橋梁を写せない専制国家であることも隠す気もなく、それに橋梁の何を軍事的な秘密としたいのかわかんないのも全く頭になかった。

ただ消せと大声で電話口で怒鳴っていた。

そして我々がその画像を処分したら、全て処分したか確認しろと叫んだ。

専制国家であることを隠す気はまるでなかった。

我々は沈みこんだ。

こんな専制国家で自由に快適な旅を提供することなどできるのだろうか、と。

権利も守るべきものの考え方も違われらと同じ鉄道を作れるのか。

我々はその時点でプロジェクトからの脱退をほぼ決めた。

そして、中国鉄道当局とは長い間協力しようとしてきたけれど、全て撤収することとした。

鉄道技術が軍事的理由で写真一枚撮ることすら許されない。

今時軍事的理由でもそんな規制をするなんて馬鹿げている。しかも実在と無関係なように処理をしてもそれを許さない。

その不合理は、防衛産業もやっている重工さんも理解していた。

そんな規制は死文であり、言いがかりそのものだった。

でも、我々はそれを争うのはもうたくさんだった。

彼らには何を言っても無駄だと思った」

皆が押し黙った。

「ところが重工さんが壁にぶち当たることになった。BCEなどに使っている我々の列車内環境管理システムBCCXの技術が必要になったんだ。

我々は重工さんには深くお世話になっている。

我々は復帰した。もうすべての資料は処分していたが、重工さんをほうっては置けなかった。

しかし、そこで復帰して協力しているとき、中国鉄道当局の連中は叫んだ。

『我々への謝罪と賠償はないのか』と。

我々は、もう何も言う気も起きなかった。

最後にそのプロジェクトについて、前々から気づいていた問題点をメモにし、それを残して帰国した。

帰国の機内で、皆泣いていた。

「あの言い方は、まるでヤクザではないか。

ヤクザが鉄道をやるなんて、ひどすぎる。

正当な理由もなく、こっちの善意も何もかも踏みにじって、最後はヤクザの因縁つけ。

こんな鉄道あってたまるか！」

「社長もご存知のはずです。鉄道の安全は、輸送の使命の第一は安全にあり、そのためには職責を超えて一致しなければならないとあります。

彼らにその意識はありません。

彼らが高速鉄道をまともに建設し、運用できるとは到底思えない。

彼らは面子さえ通ればよくて、本質なんかどうだっていい。

高速鉄道はそんな態度では運転できない。

かつての国鉄でさえ、新幹線はストライキの対象外とした。それだけ高速度は恐ろしい世界だった。

でも彼らにその感覚はない」

樋田社長は、黙っていた。

「このままだと重工さんもとんでもないことになりますよ」

樋田はなおも黙っていた。

「重工さんを置いてはいけません」

他のものも言う。

「みんな」

樋田が口を開いた。

「重工の担当が言っていた。

世界各国と仕事をしてくると思うんです。

あ、このままだと転ぶことになるな、とわかっていても、『転ばぬ前の杖』という優しさは、だいたい彼らに逆恨みされるだけなんです。

その程度の連中がこの世にはいくらでもいる。樋田さんも幾つもそれを見てきたはずですよ。

そして、この現在の中国の鉄道事情では、あまりにも中国人民が可哀想ですよ。

私にはほうっておけない。

我々がやらなければ、他の誰かが、もっと心もなく事故を起こす高速鉄道を作る。
発注者のバカさ加減はさんざん慣れています」
みな、おしだまった。

すこしずつ、この新戸田に夕闇が迫ってきた。
「それからあと、中国当局の別の担当者から我々の責任をなおも追及する書簡が届きました」
「初耳です」
「黙ってこらえていたんです。
それどころか、中国当局は我々と重工の技術を盗んで、特許を取るとまで言い出しました。
あれだけむちゃくちゃなことを言いながら、自分たちが高速鉄道の国際的なスタンダードにな
ると言い出したんです。

自分たちが『正しい鉄道のあり方』を示すのだと」
「そんな」
「社長はとどめでしたが、私は国際鉄道連合の席上で言いました。
鉄道技術の特許を取りたい、国際標準を自分たちが定めたいならそれでいい。
世界各国の鉄道技術者たちとその利用者が、いくつもの錯誤で流した血と汗で学んで共有する
鉄道工学を自分たちで独占したいなら、それで結構。
そうして鉄道のあり方を自分の基準で取り締まる憲兵となって、世界各国の鉄道を取り締められ
ばいい。

あなたたちのような無知な恥知らずが鉄道を語るなら、私たちは喜んで鉄道を剥がし、鉄道の
夢を諦めたほうがずっといい。
安全のない高速鉄道という凶器を振り回すのは、まっぴらだ。
鉄道をここまで愛してここまで来た。
愛した鉄道が凶器になるのは、とても耐えられない。
あなたたちには、その意識も、愛すらもない！」

中国の鉄道技術団はあっけにと取られていました。

そして我々はその場をさりました。
それでも、帰りのみには、絶望していました。
鉄道に生きる辛さです。
ここまでされて、こうして事故になっても、とてもざまあみろとか言えるはずがない。
同じ鉄道があれだけの犠牲者を出したこと、そしてそれがどうやっても防げなかったことが悔
しく悔しくて、そして非力な自分たちが悔やまれてならない」
そのとき、樋田社長の携帯がなった。

「秘書課からだ」
樋田はそう言うと、聞いて、そして目を伏せた。
やはり中国は支援を断ったのだ。
中国の報道の不自由さは皆知っている。
結局これも闇に葬られる事件となるのだろう。
みな、言葉もなく、沈んだ。
「国営の新華社通信とは別の報道が中国で始まりました。
いつにない激しい論調で鉄道当局の責任を告発しています！」
「えっ！」

中国の動画サイトで、事故処理の様子と、言葉はわからなくても激しい論調で当局を非難する
言葉が流れているのがわかった。
「これできっとあの中国にも自由と、安全の意識が」
皆が少し希望を口にした。

しかし樋田社長はいった。

「もう夢も見られない。
今の私は取り乱している。
犠牲になった方々のことが心に痛すぎる」

樋田はそう言うと、身を折って、握った拳で壁を叩いていた。

こんな沈痛な社長を見るのは、みな初めてだった。

その日の新戸田の夜は、北急のこれまでの歴史で少ない、残酷な夜だった。

<Endtext>